第12回 六条円卓会議 開催報告②

宗教と戦争
―信仰と平和の間で―

六条円卓会議は、宗門内外の有識者の知見を得つつ、浄土真宗本願寺派の宗制に掲げられる「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」に、宗門がどのように貢献できるのかを具体的に模索するために設置されている会議です。毎年開催し、さまざまなテーマについて議論を深めています。

第12回六条円卓会議は、2025（令和7）年3月13日に開催いたしました。テーマは、第13回宗門教学会議（2024（令和6）年7月31日開催、テーマ「平和のために何をすべきか／何ができるか―戦後80年を迎えるにあたって―」、『宗報』2024年10月号、11・12月合併号にて報告）の内容を受けて、「宗教と戦争―信仰と平和の間で―」としました。

2025（令和7）年、日本は戦後80年を迎えました。近年、戦争に関する諸分野の考究が進展し、宗教・仏教と戦争との関わりも種々論じられてきている中で、どのような視点で戦争を受け止め、宗教と戦争の関係を捉えていくべきなのかという問題意識のもと、今回のテーマが設定されました。会議では、前半の有識者発題において、宗教学・戦争論を専門とし、宗教および戦争・軍事に関する思想と歴史について、さまざまな事例を通して広く論じられている石川明人先生（桃山学院大学教授）をお招きし、戦争と宗教の歴史、現実の課題、そして「人間的な営み」である戦争についてご教示いただき、後半の全体討議では、戦争に宗教はどう関わってきたのか、これからどう関わっていくのか、人類として戦争をどう論じていくべきなのか、宗教と戦争の交錯点を学びながら平和の意味について議論を深めました。

今号では、石川先生による講義の内容（前半、『宗報』2025年7月号）をうけて行われた全体討議（後半）の内容を報告いたします。

◆全体討議（後半）

前半の石川先生の講義では、従軍チャプレン、聖書に書かれていることとその解釈、正戦論の歴史などを紹介いただきました。発題の中から、仏教の立場から真摯に向き合わなければならないテーマが多くあることを改めて認識しました。また最後に、「私たちは本当に平和主義者なのか」ということをまず考えなくてはいけないというご提言をいただきました。

これを受けて、後半の全体討議では、戦争や平和をどう考えるかを、参加者とともに議論いたしました。

○聖と俗

石川先生が講義で紹介されたアメリカの従軍チャプレンは、宗教者と軍人を兼ねており、訓練の段階で、他の信仰を持つ者とも深く関わり、自分の宗教ばかりでなく、他のさまざまな宗教の方をも対象として活動していることが紹介されました。

一人の人間が宗教と軍隊という異なる側面を持つことに関して、参加者から、アメリカやヨーロッパでは、宗教者としての価値観をもちながら、社会の中で公的な役割を担うという意識が強く、一方、日本の仏教者の中には、例えば週末はお坊さんをするけど平日は違う、というような棲み分けをしているのではないかという質問が出ました。

これに対して、石川先生は、プロテスタントの例を出されました。プロテスタントには、修道院に入り俗を離れて宗教世界の中だけで暮らすのではなく、世俗の中でそれぞれに与えられた社会的使命を果たすことを重視するという発想があり、各々の仕事を黙々と誠実にこなすことが、究極的には聖なる人生を歩むことと捉える見方があるそうです。また、カトリックにおいても修道会によってずいぶん生活のあり方が違い、世俗と完全に隔絶した塀の中のようなところで過ごすタイプの修道会もあれば、イエズス会のように、世界中に、ジャングルの中にまで入って宣教しようとするような生き方もあります。

聖と俗の関係について、参加者からは、ヨーロッパでの例をもとに質疑が展開されました。ヨーロッパでは、病院や老人ホームといった公的な場所で聖職者が活動していますが、日本ではなかなか見られない状況にあります。しかし、日本においても、四天王寺などでは、さまざまな社会的な役割を果たすための「四箇院制度」（敬田院・施薬院・療病院・悲田院）が古くからあり、その中には、医療も、貧困救済も含まれていました。日本仏教では、歴史的な要因として、原理的には、聖と俗の使い分けがなされてきましたが、社会的・歴史的な側面で、分離状態をどう考えていくのかが、今後も

大きな課題となることを確認しました。

聖と俗の関係に関しては、究極的には、政教分離の問題となります。アメリカやフランスも政教分離を原則とし、日本やイギリス、ドイツでも同様です。それぞれに政教分離を原則とすることは同じですが、その運用の仕方がそれぞれの国によって違うこともまた事実です。

例えば、アメリカの従軍チャプレンのように、たくさんの宗教を入れることで平等を保つ国もあれば、日本のように、公的な領域にいかなる宗教も入れないことで平等を保つ国もあります。平等や公平を担保するという点は同じですが、そのための具体的なやり方が違うことも、認識しなければならないことを共有しました。

○正当防衛、正戦論について

次に議論となったのが、キリスト教において広く展開されてきた「正戦論」についてです。キリスト教における戦争に関する議論の中で、正当防衛が認められてきたことに関して、どこで歯止めをかけるのかという疑問が出されました。

石川先生によれば、正戦論は紀元前から、つまりキリスト教の誕生以前から議論されてきました。哲学や倫理学、国際政治においてもそうした議論はありますが、ただし、教会の中では正当防衛についてその具体的な現場の状況を念頭においたような議論をしているわけではないとのことでした。現代においては、例えば、相手がミサイルを撃ちそうになっているから、先に相手のミサイル基地を攻撃することに関して、どう考えるのかという議論が考えられますが、神学者やキリスト教思想家としては、具体的にどう

石川明人（いしかわ　あきと）

桃山学院大学教授。1974年生まれ。北海道大学卒業、北海道大学大学院博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。専攻は宗教学、戦争論。宗教、および戦争・軍事に関する思想と歴史を研究テーマとする。著書に『ティリッヒの宗教芸術論』（北海道大学出版会、2007年）、『戦争は人間的な営みである』（並木書房、2012年）、『キリスト教と戦争―「愛と平和」を説きつつ戦う論理―』（中公新書、2016年）、『宗教を「信じる」とはどういうことか』（ちくまプリマー新書、2022年）、『戦争宗教学序説―信仰と平和のジレンマ―』（角川選書、2024年）ほか多数。

いう行為までを正当防衛と認めるかといったことを議論することは、普通はしないそうです。それは、正当防衛を認めるという程度にとどめて、慎重になるべきであり、全部認めるか、全く認めないか、どちらかというわけにもいかないというのが現実だからです。

また、『カトリック教会のカテキズム』や『教会の社会教説綱要』などに正戦論についての記述があることに関して、信徒のなかには「私は違うと思う」と主張する人もおり、何百年前の時代の戦争と今の時代の戦争というのは違うから、文字通り受け取るべきではないとする人もいるとのことです。

あくまでも「こういうふうに書いてありました」ということを受け止め、時代や状況が変わっていることから、文字通りに解釈するべきではないと考える人は、現在でも珍しくはないとされました。

○本音で平和に向き合う

前半の講義の最後に、石川先生より、「私たちは本当に平和主義者なのか。本音として平和をどう考えているのか」という大きな問いが提示されました。このテーマについて、参加者それぞれの考えを交わしました。その例を紹介します。

参加者A：平和を一番大切なものとして、今後の人生を歩んでいけるかを問われたとき、自分自身は口先でしか「平和は大事ですよね」と言えないと思った。平和に取り組んでいくとき、実践していかなければ一番大事とはならない。一人の人間としてでもそうだが、真宗の僧侶としても、何もできていない。それでも、やっぱり平和を発信していかなければならないと考えている。

参加者B：教義がこうだから、私は平和を望むんだという話ではない。聖か俗かという二項対立で考えるのではなく、私のすべてで宗教をどう捉えていくのかといったところで考えていかないと、問題が矮小化してしまう。教えをいただく私がどうなのか、といったところから発信していかないと、私の言葉になっていかないし、私の実践にもなっていかない。

参加者C：誰かに守ってもらっているという立場にいながら、誰かを危ない目に遭わせていることもある。本当に平和を問うことが、どういうふうに実現できるのか、また、本当に人はその問いに向き合えるのかと考えさせられた。

参加者D：平和とは何かを問うとき、わが家のことや、田舎の寺のことを考える。最近は安全保障の文脈で、食の自給率とかが問題になる。門徒さんの育てた畑のものであるとか、米であるとか、釣った魚であるとか、そうしたところを、それをいかに実り豊かなものにしていくかということをお寺の中で

考えていくということが、一つ、田舎のお寺の平和を考える第一歩なのかなと思った。

参加者E：平和はすごく漠然としたもので、個人の平和、さらには世界全体に広げた平和と、いろいろなところで考えなければならない。ウクライナで戦争が続き、イスラエル、パレスチナのガザ地区でも争いが起きているが、遠いところの話という感覚は、どうしてもある。以前、パレスチナ自治区まで行ったことがあり、そこでパレスチナ人の方と仲良くなって、案内してくれた経験がある。戦争のニュースを見るたびに、その人のことを思い出す。そういう共感、そういう人たちがいるという想像力、仏教では慈悲というか、その人に共感できるか、できないかという一番小さなところが、平和を考えるときに重要だと思った。

参加者F：近代日本の仏教者の研究をやっていると、ほぼ例外なく戦争に関わっていくが、自分が当時、その場にいたとして、違う道を選べたかといわれると、おそらく難しかっただろうと思う。現代においても、非暴力であれば平和なのかという問題とかも考え出すと、よくわからなくなってくるところもある。

参加者G：最後の問いは、ずっと問わないといけない。どう向き合っていくのかも含めて、仏教者として、一般の人に聞かれたら、どう答えるんだということを、しっかり持っていくというところが、大事だと思った。

◆まとめにかえて

人間として、宗教者として、戦争にどう向き合うのか

今回の六条円卓会議では、キリスト教の例をもとに、宗教と戦争、信仰と平和について考えてきました。私たちの普段の生活は、実は戦争や平和に深く関連していること、平和や戦争に関する言葉や解釈も、時代を経て変化し、多くの矛盾やジレンマを抱えうることを学びました。

石川先生は、最後に、「人はそもそも本当に平和を望んでいるのか」という観点から、たとえ話を提示してくださいました。

今ここに神さまが降りてきて、右手には戦争のない世界、左手には10億円、「どっちでも好きな方をあなたにあげるよ」と言われたときに、世の人たちは、迷いもせずに右手の方にすがりつくかどうか。

ほとんどの人は、「あなたは平和を望みますか」と問われれば、「もちろん平和を望みます」と答える。しかし、自分が部屋に一人でいるときに、「戦争のない世界」か「10億円」、さあどちらでも欲しい方をどうぞ、と言われたら、実際には多くの人はこっそりと後者にすがりつくのではないか。しかし、人間というものに完全に悲観的になるということではなく、まずはとにかく自分自身の本音を見つめ抜くことが重要ではないかと提示されました。

「本音で平和に向き合えているか」という問いは、念仏者として、そして人間として、向き合い続けていくべき課題です。戦後80年を迎えた本年、宗教が、宗教者が、自らの信仰を持ちながら、いかに戦争や平和に向き合ってきたのかを改めて学び、平和に関する取り組みを続けていきたいと思います。

総合研究所　現代教学・課題担当